The National Association of College Teachers for Japanese Language and Literature Education

〔研究論文〕

個と共同体との関係性を築く古典学習指導
——大村はまの単元学習指導「古典へのとびら」（昭34）を中心に——

坂　東　智　子

1．本稿の目的

詩人であり思想家の吉本隆明（1968）は，「人間はひとりの個体という以外にどんな態度をとりうるものか，そしてひとりの個体という態度は，それ以外の態度とのあいだにどんな関係をもつのか」[1]という問題意識に立脚して『共同幻想論』を書き，『遠野物語』や『古事記』に共同体の一員としての行為の意味を求めた。個は独立した存在であるが同時になんらかの共同性をもち世界と関係する。個の態度や感性，思考の枠組みは自立したものであるかに見えて実は帰属する共同体のそれに関係して規定される。古典作品はそれぞれの時代の個と共同体のあり方の典型を表徴したものであるともいえよう。

さまざまな共同体の中でも言語文化を共有する言語共同体は，新陳代謝をくり返し変化し続けているが，過去から現在そして未来も存在し続けるであろう歴史性を有する生態としての共同体である。古典を学ぶことは共同性を獲得して言語共同体との関係性を築くことであるとともに，帰属する共同体の共同性を自覚して相対化できる視座を持つことである。ここでいう共同性とは共通の言語作品を読み継ぐという共通項を持つことで獲得されるものであり，その共通項は過去から未来へ繋がる時間軸を有する共同性を成立させる。例えば，枕草子の読者になるということは平安時代以降の枕草子読者共同体の一員となることである。このような時間軸をもつ共同性の獲得は，個を形づくる文化や風習，美意識や思考の枠組みの歴史性を自覚することを可能にし，現代や現在の自己を相対化する視座を個に与える。これは国際化の中で最も必要とされる。

小学校の古典教育では共通の言語作品を読み継ぐことで読者共同体の一員となる。そして，文語の響きやリズムを心地よいと感じる感性をもつといった共同性を獲得する。しかし，共同性の歴史性を自覚したり相対化したりすることは難しい段階である。

中学校段階では同じ古典作品を読み継ぐ読者共同体の共同性を獲得しつつその歴史性を認識することが可能となろう。中学校の古典学習は，学習者が時間軸を有する共同性を自覚し，個と共同体との関係性が構築されたか否かについても意識する場となる。このような自覚的な個になってこそ，学習者は共同体との自律的な関係をもつことができ，新たな共同性の生産や創造を担う個となるのである。

大村はまの「古典へのとびら」（昭34）「扇の的」実践[2]では，家族や周囲の人315名を対象として「扇の的」の受容に関する聞き取り調査とその集計作業が行われた。この学習は「扇の的」読者共同体の共同性を学習者に目に見えるものとして示し，身のまわりの社会という空間と「扇の的」を読み継いできた時間軸をもつ共同体の中に学習者を位置づけるものであった。これは中学校段階でこそ可能な古典学習指導である。「那須与一」（扇の的）は，初等段階では戦前の国定第二期国語教科書から国定第五期国語教科書まで連続して教材化されている[3]。戦後も昭和55年以降現在まで文語に関する教材の事例として小学校の教科書に採録され続けている[4]。中学校では平成18年度版国語教科書第２学年で３社（東京書籍，光村図書，教育出版）が採択している[5]国民的な古典教材の一つである。このような教材の性格を熟知して大村はまは，「『扇の的』のどういうところが長く広く国民に愛されてきたのだろうか」と中学３年生に問いかけた。それを考える手だてとして選ばれたのが調査を用いた学習方法である。

「扇の的」学習に調査を用いた実践例は管見の限り報告されていない。本実践で大村はまが使用した教科書（西尾実編）指導書には朗読と話し合いによる学習指導例が示され[6]，調査についての言及はない。大村はまが本実践で独自に創案したものである。本研究は教材「扇の的」と学習者を結ぶ調査活動の有効性と成果を明らかにすることをねらいとする。

大村はま古典指導の先行研究では，望月敬幸（1993）が「扇の的」の調査学習を具体的に取り上

NII-Electronic Library Service

げ，「この指導によって，学習者たちは，自分達の心の奥深くに存在する日本人としての意識をさらに明確に確認していくことになると思われる」[7]として指導面から評価する。しかし，調査を用いた学習が学習者にどのような変容をもたらしたのかについて具体的に論じてはいない。本稿では，望月のいう「日本人としての意識」を「人間が個体としてではなく，なんらかの共同性としてこの世界と関係する観念の在り方」[8]であると捉え直し，17名の学習記録[9]を新たな資料として次の順で考察を行う。①単元全体の構造を捉える。②古典学習の結びの意見作文の分析により単元全体での学習者個々の学びの成果を明らかにする。③「扇の的」学習の過程と学習者の変容を学習記録をもとに検証する。

本稿は，以上の考察によって，学習者が「扇の的」を受容する共同体との関係性を構築していく学びの内実と成果を詳らかにし，中学校古典学習指導に切り拓かれた新生面を明らかにする。

2．単元「古典へのとびら」（昭34）の概要

2.1.　指導のねらいと主な学習活動

本単元は大村はま自身も編集に参加した西尾実編集の教科書[10]所収の４つの代表的古典教材（更級日記，平家物語，徒然草，枕草子）から成る。大村はまは教科書掲載順に学習を進めている。更級が堀辰雄の創作的現代語訳，平家は中学生向きに書かれた現代語訳，徒然が原文と現代語訳，枕草子が原文と注釈である。導入は現代語訳で，学習が進むにつれて原文に触れるという教材編成であった。「扇の的」学習では教科書の現代語訳と大村はまが準備した原文の一部プリントが教材とされた。指導のねらいは後掲表１のように教材ごとに定められている。「扇の的」学習では「古典を自分たちの身の内のものと感じさせる」として，古典世界と学習者の生活の結びつきを実感させることが目指された。

導入，４つの教材，まとめの学習の全てで「書く」活動（後掲表１下線部）が行われている[11]。西尾実は言語生活の向上には作文と学習記録を「書く」ことが必要であり，「考える」ことの発展に一番役立つのは「書く」ことだと考えている[12]。この西尾の考えを大村はまは古典学習指導の場でも生かそうとしたといえよう。本単元の「書くこと」の目標は，「はっきりした根拠に基づいて，事実や意見を正確に書く態度を伸ばすこと。」であり，「扇の的」での調査の集計をもとにした学習や結びの意見文はこの

表１　「古典へのとびら」の概要

教　材	指導のねらい	主な学習活動
導入 （1時間）		古典学習への期待を書き話し合う。図書委員から図書館にある古典の本についての紹介を聞く。
物語の中の少女 （更級） 現代語訳 （4時間）	ぐっと古典にひきよせる	短作文を書く。今まで古典に対して持っていた考えを比べる。手引きをもとに表現について考え話し合う。「わたしたちと古典」という文章を書く。
扇の的 （平家） 現代語訳 （3時間）	古典を自分たちの身の内のものと感じさせる	調査をする。グループで読む。新しく知った内容を箇条書きにする。調査結果の集計とグループでの話し合い。発表。
木のぼり （徒然草） 原文と現代語訳 （5時間）	これまで進めてきた心持ちをここでさらにもりあげる	「木のぼり」に似た話を思い出す。グループで話し合う。「馬乗り」から学んだことを標語にする。「えのきの僧正」の結びを書き発表しあう。
うつくしきもの・にくきもの（枕草子）原文と注釈 （2時間）	別の面からもう一度，以上の古典と自分たちとの間に通じるものの多いことを味わい返す	共鳴するところを考えて文章にまとめる。徒然草と枕草子からことば（古今異義語，古今同義語，使われなくなったもの）をひろう。
まとめ （2時間）	①古典文学を身近なものとして味わわせ古典に深く親しみを持たせる②古典文学を読む意義を体験によって味わわせ今の文学も古典を受けついだものでありこれからの文学も古典からの発展であることを考えさせる	3つの題から1つを選んで作文を書く。（意見文） A　中学生には古典の学習は，むりだという意見に対して。 B　古典はむずかしいだろう，いやだなといっている2年生に。 C　古典の学習から学びえたこと，興味をもったこと。 ＊教材欄の（時間）は全集指導計画の時間である。

NII-Electronic Library Service

目標を具体的に実現に導く学習活動である。大村はまは古典学習においても，「話す，聞く，書く，読む」という言語生活の学習を徹底させようとしている。古典作品世界という大きな言語単位を対象とした導入学習から，枕草子のことばを拾う小さな言語単位の学習へと学習対象が絞り込まれている。古典の世界に学習者を招き入れ惹きつけたうえで，言語の学習としての古典学習を成立させようと意図された単元の構造を読み取ることができる。

表２　学習記録一覧と古典の結びの作文分析

No	学習記録名 記録番号	課題	①教材				②	③　作文に書かれた主な内容　（学習者のことばを中心に筆者がまとめたもの）	④古典学習をどう評価しているか
			更	平	徒	枕	調		
1	国語「古典」 3431A12（男）	B		○			○	扇の的を与一が射た時，敵味方ともにほめたたえた。日本人は今でもこんな場面が好きではないか。内容は，現代文と変わりはない。	実際に学んでみると古典はむずかしくなく学びやすい。
2	古典 3431A25（男）	A		○			○	「扇の的」が長く読まれてきたのは与一の技術がすぐれ敵も味方もなく拍手する場面があるからだ。古典は今の生活に深くむすびついている。	おもしろみがわき，古典への親しみさえありました。
3	古典から 3431A43（女）	B						言葉はむずかしいが，言葉の壁が取れれば古典の内容はおもしろく，親しみやすい。	古典のよさに心うたれている。
4	国語　古典 3431A47（女）	A						昔の人の考えを知ることが出来てよかった。みんなで古典をたくさん読んで昔の人の考えを理解しあっていきたい。	標語づくり，話しあいなどの学習活動が楽しかった。
5	古典 3431A52（女）	B						古典の中で今も使われていることばが，全体の 60％もある。言葉の壁はうすい。ことばの壁がとれれば私たちの生活に直接つながってくる。	古典はつまらないなどということはぜったいにない。
6	古典から 3431C41（女）	無		絵				（与一の絵を 2 枚扉に貼り表紙は浮世絵である。感想は少なくプリントや授業のノートが中心。）	
7	国語　古典 3431C48（女）	B		○			○	「扇の的」は全部といっていいくらい知っている人が多い。今の文学も昔の文学があったからこそ生まれているのです。	古典をやさしく軽い気持ちで学習していけると思った。
8	古典から 3431C54（女）	B	○		○			古典の勉強が進むにつれて，もっともっと読みたくなってしまった。	おもしろく古典の勉強ができた。
9	国語の帳面 3431C57（女）	C			○			今と昔では，ことばと世の中がちがう。人物の考え方気持などは，今に通じるものがたくさんあると私は思う。共通する点がたくさんある。	とてもためになる。
10	古典から 3431C59（女）	A 無						（題は記録しているが，作文は綴じていない。絵を貼り，自分で描いて古典を楽しんでいる。）	
11	古典から 3431C58（女）	A	○		○			更級日記は「ことばのちがう現代小説」である。古典を深く知ることによって私たちは文学を深く理解できるのだと思います。	知らない間に古典を読み，触れることができた。
12	古典から 3431D46（女）	B	○	○	○		○	「扇の的」では那須の与一が美しい武装であらわれた。ここではこの「扇の的がどうして世の中の人に広く深く親しまれているか」をやった。	ことばの壁がとれれば，古典はむずかしくない。
13	古典から 3431D56（女）	B	○	○	○		○	私たちは，初めて学ぶ古典という道を越えてきた。今感じることは，新しいものをひとつ知った喜びと，まだまだ，かくされている古代の秘密の数々への興味である。	学べば学ぶほど，古典への興味がわいてくる。
14	古典 3431E42（女）	A	○	○	○			古典というのは，読むまではとてもとっつきにくいが，一度読むと非常におもしろく興味深いものであることがわかる。	学びとることが多くあり，いろいろ勉強になった。
15	古典から 3431E43（女）	無						（全集に取り上げられている学習者。学習記録に古典の結びの作文は無い。）	
16	古典から 3431E44（女）	B						発表（話し合い）や短文（文章につづる）ことが多い単元であった。古典はむずかしいなどと考える前に，やさしいのを読めばよいのです。	本当に古典は読めば楽しく，又おもしろいものです。
17	国語　古典 3431E57（女）	B		○			○	古典が長く多くの人に読まれてきた理由を考えた。新しい古典の学習方法によって，古典を身近なものに感じることができた。	古典を楽しく勉強しました。

NII-Electronic Library Service

The National Association of College Teachers for Japanese Language and Literature Education

2.2. 古典学習の結びの作文分析

単元全体での学習者個々の学びの実際と成果を捉えるために，前掲表１のまとめの課題作文14編（17名のうち３名は作文がない）を，４つの観点（①学習が記述されている教材，②調査による学習に言及しているか，③作文に書かれた主な内容，④古典学習をどう評価しているか）で分析し前掲表２にまとめた。以下の学習者番号は，表２のNo.による。14編のうち７編が「扇の的」学習を取り上げ，そのうちの６編が調査による学習に言及している（表２の調査欄○印）。作文が綴じられていない学習者６は，与一の絵を学習記録の扉に２枚貼込んでいる。14編全てが本単元の学習を肯定的に評価し，学んでみると難しくない，学びやすいと記している。

本単元の前年の昭和33年10月に告示された中学校学習指導要領では学年ごとの古典教材の選定条件や古典学習指導のあり方が述べられ古典教育重視の傾向が見られる。これに対して懸念を抱き一部では古典教育不要論も出た時代である。「中学生には古典の学習は，むりではないかという意見に対して」という作文課題はこれらを意識したものであった可能性が高い。これに対して，前掲表２波線部のように，学習者は「古典は今の生活に深く結びついている」，「身近なもので現代文と同じように楽しめる」，「古典学習は必要である」などのことを，自身の古典学習体験を根拠として，実感を伴った自分のことばで表現している。学習者の生活と古典を結ぶ学習が成立していることが分かる。

３．「扇の的」学習の実際

3.1. 教材

本単元「扇の的」の教材は『平家物語』（通称高野本，覚一別本）「那須与一」の章段全部を中学生向けに現代語訳したものである。『日本古典文学全集　平家物語二』[13]の原文・現代語訳と教材本文を対照すると，教材文は原文に忠実にそいながら主語や目的語が丁寧に補われ，「腕きき」を「腕はたしかなもの」とするなど，文語的な表現やいいまわしが中学生向けにわかりやすく書き換えられている。

平成18年版教科書では，中学２年で光村，教出，東書の３社が「扇の的」を採録している。そのうち光村，東書が次の「弓流」の冒頭部，与一が扇の的を見事に射たあと義経の命により平家方の男を射倒す場面を加えて，美しく勇ましい劇的な場面ばかりではない，武士の非情さ，戦場の不条理も描かれている。大村はまは「国民に愛されてきた」物語として「扇の的」を捉え，指導のねらいを「古典を自分たちの身の内のものと感じさせる」と定めている。そのために，「弓流」は含まない「那須与一」の全文のみを完結した一つの物語として教材とし調査や話し合いの対象としたと推察される。

3.2. 学習活動

17名中10名以上の学習記録に記述のある学習活動は以下の４項目である。①「私と扇の的」を書く（13名），②調査結果の集計（グループで）（15名），③文法についての記述（ワークの解答を含む）（10名），④扇の的が長く広く愛された理由（13名）。②③は全集には記載がなく学習記録のみ記録が残されている。全集と学習記録から推察できる学習の順序は次の通りである。

〔１〕調査の説明。調査Ａ「扇の的」の話（那須与一の話）を知っていますか。調査Ｂ「扇の的」のどういうところが印象に残っていますか。
〔２〕読み。（グループで）
〔３〕学習者自身が今まで知っていた「扇の的」の話と今回の教材のちがっているところ，新しく知ったことを箇条書きにする。（個人）
〔４〕調査結果のまとめ。（グループで）
〔５〕調査結果の発表。（グループごとに）
〔６〕５をもとに「扇の的」のどういう点が長く広く国民に愛されたのかを考える。（グループ）
〔７〕「扇の的」の原文を聞く。（全体）
〔８〕「扇の的」の朗読発表。（２グループ）
〔９〕６の話し合いの結果を発表する。（全体）
〔10〕「扇の的」と自分たちを書く。（個人）

調査を用いた学習が〔1〕〔4〕〔5〕〔6〕〔9〕である。グループでの結果集計，話し合い，発表が学習活動の中心である。〔2〕〔7〕〔8〕で読みの学習を行い大村が絵を見せながら語句の意味を説明したことが記録されている。〔3〕〔10〕は書く学習である。調査を中核に置きながら，それだけではなく，朗読や作文を配して扇の的の鑑賞を成立させ，古典を身の内のものとするために構造化された学習である。

3.3. 調査学習の実際

3.3.1. 調査用紙と調査の方法

調査は後掲資料１の調査用紙を用いて行われた。調査用紙Ｂの（　）の中のことばは，相手が年少であった場合の言いかえである。調査はこのカードに直接記入してもらっても，口頭で聞いて書き入れて

NII-Electronic Library Service

もよいとされた。１名の調査につき１枚のカードを用いるように大村はまは指示している。下の欄の右の区分の中は，印象に残っているという場合を分類するために使われた。

資料１　調査用紙（全集より）[14]

No.（　）	歳	男　女	
A「扇の的」の話（那須与一の話）を知っていますか			
B　どういうところが印象に残っていますか。（心にのこっていますか）（どういうところを思い出す？）（どういうところが好き？）			

3.3.2.　調査結果のまとめ

調査結果は，大村はま作成の整理用紙[15]を用いて，知っている人数と知らない人数を年齢別に集計し，印象に残っているところも年齢別にまとめられた。グループで調査をまとめるときの様子が次の資料２に記述されている。

資料２　学習者３　ＫＥさん（Ａ組）の記録

「ここの所よ」，「あら，みんな知っているわ」これは，グループになった時，「扇の的」の調査をまとめる時の会話である。きょうは，話しあい風で，しかもグループ風という，ちょっとしたカクテルのような，席になった。

調査結果をもとに，身を乗り出すようにして学習に取り組み話し合っている学習者の姿が浮かぶ。

後掲資料３の調査Ａの結果表に見られるように，20才以上では９割以上の人が，小学生でも８割が知っており，「扇の的」は国民的な古典といってよい客観的なデータが学習者に与えられた。

印象に残っている場面の第１位は「矢が扇を射たところ」で，回答の半数以上がこの場面を挙げている。一方，(2)(4)は矢を射る前の緊張した場面，(5)(6)は与一が決心するまでの心の動きが与一の姿と重なって描き出されている場面である。冨倉徳次郎（1967）は，「扇の的の説話は絵画仕立て」であり，辞退の後与一が矢を射る決心をしたあとは，「源氏全軍の名誉，自己の名誉，それを乗り超えてただ神に通じる弓術そのものの心になりきってゆくところが強い感銘を与えると思う」と記す[16]。矢を射る瞬間に与一の人生が凝縮し，その場の人の目と耳も読み手聞き手の意識もそこに集中していく。心を純粋にして今この一瞬に賭ける姿が共感を呼び現在でも広く受容されていることを調査結果は示している。

「教えられる」のではなく，聞き取り調査を行い集計作業をする過程で，普段は意識することが難しい「扇の的」を受容するという共同性が可視化された。古典学習の過程が，家族や地域の人々との共同性を自覚し，学習者個人と「扇の的」を受容する共同体との関係性を構築する場となっている。

資料３　調査の結果（全集より抜粋）

【調査Ａ】扇の的（那須与一の話）を知っていますか。

年　齢	調査した総人数	知っていた人数	知らなかった人数
40才以上	38	37	1
20－30代	49	46	3
10代	113	79	34
自分たち	50	45	5
本校　1・2年（10代と重複）	(72)	(50)	(22)
小学生たち	65	52	13
計	315	259	56

【調査Ｂ】どういうところが印象に残っていますか

(1)矢が扇のかなめを射たところ／矢が扇を射て，扇が海に落ちたところ／矢がうまく扇を射たので，敵も味方もどよめいている情景／射られた扇がひらひらと落ちるところ(計231名)　(2)与一がしずしずと海の中へ馬を乗り入れていくところ（98名）(3)船が漕ぎ出されてきて，美しい女房が，こちらへ向かって招いているところ(51名)(4)与一が弓を引きしぼって，いま，放とうとしているところ(38名)(5)与一が義経の前にかしこまっているところ(16名)(6)与一が決心して義経の前から下がってくるところ(4名)(7)その他(7名)

3.3.3.　話し合いの結果を発表する

考えるための手引きとして大村はまは「羽衣」を例話とした。これは「扇の的」のどういう点が長く広く国民に愛されたのかを考える着眼点を示すためのものである。音声による手引きであり，こうした周到な手だてによって学習が成立している。

資料４　学習者３　ＫＥさん（Ａ組）の記録

・日本の美しいというわくは，きちっとあるのであって，絵のような，静かな美しさを，愛している。・いさましさの中にもあらそいをふくんだのを，好む。・人と人とのあらそいがある。それを見るのは，みな好む。そして，その中にゆとりがあるのを日本人は好む。

NII-Electronic Library Service

資料５　学習者５　ＳＴさん（Ａ組）の記録

・風景が美しい。風景だけという班と，着物などの美しさをいった班とがある。・とてもスリルがある。・昔風のことばに興味がひかれる・自分が命をかけてやった（スリルと結びつく）・色彩がはでで，でてくるものがしなやかで，とてもはく力がある。・風流なところがある。（昔風と関連）・夢のようなところがある・とても神秘的である・戦というものが，とてもたのもしく感じられる・与一の功績を，てき，みかた，区別なく，平家は船はたをたたいて感嘆し，陸では，源氏がえびらをたたいて喜びの声をあげた，などいかにも国民的で親しみやすい。（今日の感想）「扇の的」のどういうところが，長く広く国民に愛されているか，ということについて話しあったが，扇の的のように，老人から下は，小さな幼稚園の子も知っている（調査による）物語は，少ないと思う。それだけに，この物語には，おおきな意義があると思う。

学習者３は「日本の美しいというわくはきちっとある」と日本人の美意識を捉え，「あらそいのなかにもゆとりのあるのを好む」という記述は，日本人の好みや国民性について言及したもので，学習記録を書くことによりそれを相対化して認識している。さらに，扇の的の魅力や本質，受容され続けてきた理由を短い記述でまとめ得ている。

学習者５は発表を細かいところまで注意深く聞き，理解したことを具体的に記録している。風景だけの美しさではなく着物などの美しさも描写されていること。班によって読みが異なること。矢を射た後の平家と源氏の様子が音響を伴う映像として学習者にイメージされ，敵も味方もなく感嘆の声をあげた場面が心情的にも国民的で親しみやすい所であると認識している。

このような国民性や美意識にまで達する深い読みは自然発生的，自発的に行うことは極めて難しい。調査による学習と朗読や原文を聞く学習が一体となって，臨場感を持って作品世界を体験し鑑賞することができてはじめて可能となるものである。

3.4.　「古典の結びに」と題した作文の考察

前掲表２で分析した作文の実例をあげる。

学習者１は「日本人は今でもこんな場面が好きではないか。昔の人も好きだったのだ。」と，現代にも通じるものがあるからこそ古典なのだと実感し，それを自分なりのことばで表現している。古典学習によって，なぜ千年近い年月を経て読まれ続けてきたのか，古典が古典である理由を学習者自身が発見し，言語化することで認識している。

資料６　学習者１　ＳＴさん（Ａ組）の記録

（作文）**Ｂ古典はむずかしくて，勉強がたいへんだという二年生に，**（前略引用者）「那須与一」の話の中で扇の的を与一が射た時，適味方とも一せいに与一をほめたたえたところがあった。日本人は今でもこんな場面が好きではないか。昔の人も好きだったのだ。だから内容は，現代文と変わりはない。／最後に君たちはなぜ何千年何百年前の書物が現代でもよまれているのか考えれば，古典がむずかしくないということがわかるだろう。

資料７　学習者13　ＮＭさん（Ｄ組）の記録

（作文課題 B）（前略引用者）ですから，次の「扇の的」では，もっと親しみを与えてくれるだろうと，大きく期待をかけました。それは，「扇の的」はひろく，愛された，「那須の与一の話」でしたからです。／ここで私たちは，グループに分かれ，「なぜ，この話が，こんなに長く，広く愛されたか」について，話しあいました。たくさんの原因が各班から発表されました。それをまとめてみますと，1．射おとせるか，射落せぬかの，スリル満点な味わいがある。2．文全体が勇ましい。3．とても美しい。（景色，服装）4．ふつうの人ができないことをする。5．なんともいえないなごやかなふんい気が流れて，戦いだとは，思えない。／こうやって話しあい，私たちは，ますます古典へ魂（ママ）かれていきました。そして，この話は，今まで聞いていた話しと少しちがうのに気ずき（ママ），新しく眼を一つ開いたような気持になりました。（下線は引用者）

学習者13は「扇の的」の前学習「物語の中の少女」の学習が「秘密の窓をのぞくようで」古典への「親しみを与えてくれる」ものであったと作文のはじめに記している。この成功が次の「扇の的」学習への期待となる。教材個々の学習が独立して成立した上で，教材を１つ終えるごとに段階を踏んで「古典に親しむ」が深められている。各班の発表を場面の緊迫感や美しさ，文体の特徴などの５項目に簡潔にまとめ学習で得たものの要点をつかんでいる。

中学生はテストや部活動などで日々勝負を体験している。小さな勝負であっても中学生にとっては毎回が真剣な自分を試し試される場である。与一が矢を射る場面のスリルを実生活に重ね自分のこととして教材を読むことで古典を身近なものと感じますます古典に惹かれていったと推察できる。今まで知っていた話を中学３年生で改めて学習し，「眼を一つ開いた」ような発見の喜び，学びの喜びがあった。

中学生の実生活と古典を結ぶ学習方法と何を考え

NII-Electronic Library Service

させ読み取らせるのかというねらいの定め方によって，発達段階に応じた読み味わいや理解が行われている。小学校では分からなかった作品の価値が中学校で理解できるようになる。読みの深まりや自身の成長を自覚できることも小中で共通教材を学習する意義のひとつであることを資料７は示唆している。

資料８　学習者17　ＮＴさん（Ｅ組）の記録

（作文課題 B）（前略引用者）ある一つの古典を選び，それが，今日まで，いろいろな階級の人に読まれてきた理由を考え，皆で発表しあい，ここにも私たちの思想と，昔の人々の思想の相違の小さいことに気づきました。このように古典を勉強して，私たちは，古典がむずかしなどと身のあかほども感じませんでした。みなさんの中には，古典の勉強を，古典の本を読み，多くのわからない字を字引で引く，これが勉強だと考えている方も多いことと思います。しかし，私たちからみれば，そんな勉強の仕方は古いのです。／私たちは，古典の中の思想や，ことばの相違などを勉強し，多くの人々から，遠いものだと思われていた，古典を身近かなものにしていっています。このように勉強して，私たちは，古典を深くではありませんが，理解できたと思います。ただ，読むだけの理解以上に。

訓詁注釈的な古典学習ではない学習方法は新鮮で意欲的に取り組めた達成感の得られたものであった。「古典をむずかしなどと身のあかほども感じませんでした」は学習者にとって古典が身近なものになった自信に裏打ちされた表現である。

「読むだけの理解」以上の理解とは昔の人の思想にまで達した読みを指すものだと考えられる。

４．調査による学習と言語化することの有効性

「扇の的」の調査学習の意義を「個と共同体との関係性」「学習者の側」から捉え直すことによって，新たに次の６点の有効性が明らかになった。

１．調査は学習者の身のまわりの幅広い年齢層の人々の「扇の的」受容の実態を客観的な数字として示し，学習に科学的な視点を与えた。

２．　調査結果を集計し正確に記録することが「古典とは何か」「古典はどうして今まで読み続けられてきたのか」「古典と自分はどのように繋がっているのか」を考える実の場となり，「扇の的」を受容してきた言語共同体の時間軸をもつ共同性を獲得する過程そのものとなった。

３．調査によって学習者は新たな読みの観点を見出し教材の読み深めが主体的能動的に行われた。

４．調査結果をもとにグループや教室全体で話し合うことで，学習者は世代を越えた人達との古典受容の共通性，同質性を自覚し，自己の感性や感覚，美意識や考え方がどのようにして形成されているのかに目を向け，それを相対化することができた。

５．身のまわりの人々に聞き取り調査をすることで教室内での古典の学びが学習者の生活圏にまで広がる学びとなった。

６．学習者は「扇の的」を共通項として家族や周囲の人々との共同性を獲得し，「扇の的」を受容する共同体と学習者の自律的な関係性が構築された。

ストーリーを知る学習や文語に親しむ学習は小学校でも可能なものといえよう。それを基盤として，中学校段階では表現に即しながらその奥に流れる古典文学の命に触れ楽しみ味わい，さらに古典を生み出し受容し続けてきた民族の精神史にまで達する古典学習が可能となる。大村はまは「扇の的」学習に調査活動を取り入れることで質の高い学習を成立させた。調査学習が万能ではないが，教材と学習者の実生活を結ぶためには，教材特性と学習者の実態に応じた，このような具体的な手だてが必要である。

学習記録を読むと，小学校では「扇の的」を知っているという無自覚で自然な共同体との関係性が築かれていたことがわかる。それが，中学３年生での学習により，学習者は「扇の的」の魅力を十分に知り味わう鑑賞者として「扇の的」の読者共同体の成員となりその共同性を自覚している。これからの古典学習指導では，小中共通教材を発達段階に応じて指導し展開することが大きな課題である。何を目標とし，目標を達成するために学習活動をどう組織するのか，本実践から学ぶべきものは多い。

５．おわりに

自分の内に存在する日本人的なもの，日本という土地に生まれ育った自分の感性や美意識，心情やものの考え方を，「これはある意味では日本的なものの見方，感じ方である」とメタ的に認知できることは，他の民族や他国の人達のそれを認めることができる基底となる。自己を形成するものを自覚し相対化できて始めて他者への理解と共感が生まれるといえよう。国際化の中での古典学習の意義は，時間軸をもつ共同性の観念を獲得し，言語や文化を共有する共同体への帰属意識を形成してアイデンティティを確立する場となることである。しかし，一方では，

NII-Electronic Library Service

The National Association of College Teachers for Japanese Language and Literature Education

それを客観化し自己の態度や感性，思考の枠組みを相対化する視座を得ることも極めて重要である。中学校の調査を用いた「扇の的」学習は，そのどちらをも成立させる可能性を示唆している。

古典の学びは学習者の実生活と結びつきにくく，狭い教室の中での学びとなりやすい。生活と乖離した机上の知識や教養は，学習者と共同体との関係性を育むことが少ない。あらゆる文化は生活と結びついて始めて，それを受け取った者が新しい文化を生活の中で創造していく力の源泉となる。伝統的な言語文化を継承し発展させ，生態としての言語共同体の生産性を高めるためには，古典教材と学習者の生活を結ぶ古典学習指導が創造されなければならない。大村はまの「扇の的」学習はそういった古典の学びの創造的展開を可能にする実践であった。

時間軸を有する共同性の獲得がなされる古典教材の発掘と再発見に努めること。その教材特性を見極め教材と学習者の生活を結ぶ学習方法を探ることが，中学校古典学習指導研究の今後の課題である。

〔注〕

1　吉本隆明（1968）『共同幻想論』（39版1981）河出書房新社，p. 7

2　大村はまが昭和34年４月～６月に，文海中学校３学年を対象に行った実践であり，西尾実の古稀祝いの会でのものである。大村はま（1983）『大村はま国語教室　第３巻　古典に親しませる学習指導』筑摩書房，pp. 91-133

3　棚田真由美（2009）「初等段階における『平家物語』「那須与一」の教材化に関する考察」（全国大学国語教育学会『国語科教育研究』第116回秋田大会発表要旨集）p. 122

4　３に同じ，p. 123

5　吉田裕久編（2007）『昭和59年度版～平成18年度版中学校国語教科書教材目録』（広島大学大学院教育学研究科国語教育学研究室刊）p. 221

6　西尾実編著（1992）昭和31年度版「国語・学習指導の研究三上」（復刻「中学国語・学習指導の研究」全18冊）筑摩書房，p. 36。話し合いのテーマとして示されているのは，「この『扇の的』の話は昔から国民的に好かれた話であるが，どういう点で，それはどこの場面が愛されたのだろうか」と「今の少年少女，つまり自分たちは，どう思うか」の２つである。大村はまは話し合いのテーマは指導書からそのまま採用し，実践では新たに調査学習を取り入れている。現行の中学校教科書で「扇の的」を採録している３社の指導書では，東書が群読発表をし相互評価する，光村が音読と心情の読み取り，教書が音読と場面の状況を読み取るといった指導案を示している。

7　望月敬幸（1993）『中学校における古典指導の研究』（修士論文　鳴門教育大学大学院），p. 271。本単元の先行研究のうち，「調査」を扱うのは望月のみである。他の先行研究は次の２つがある。佐々木勝司（1994）『中学校における古典指導の研究Ⅰ』（修士論文　鳴門教育大学大学院），渡辺春美（2000）「戦後古典教育実践史の研究（16）—昭和30年代の大村はま氏の場合—」（『教育学研究紀要』中国四国教育学会刊）『戦後における中学校古典学習指導の考究』渓水社，2007，pp. 67-85。渡辺は何を学びの対象としているかという観点から本単元を考察し①古典の学習②態度と言語能力③古典学習の意義④授業（学習）の対象化の４層構造を持つことを明らかにし，「望まれる古典教育の授業方法を示唆するものといえる」と結論づけている。望月，佐々木はともに，「教科書教材を用いながら，充実した言語活動の場を設定し，古典に親しませるとともに，言語能力を育成するものであった」としている。

8　１に同じ。

9　鳴門教育大学図書館大村はま文庫には古典関連の学習記録100冊が所蔵されている。そのうち本単元に関する学習記録は17冊である。

10　西尾実編「国語三上」筑摩書房昭和31年版。

11　本単元が実践された昭和34年は，文海中学校が東京都の作文研究指定校となっていた。大村はま（1991）『大村はま国語教室　第６巻　作文学習指導の展開』筑摩書房，p. 127

12　西尾実（1968）「言語教育学の発見」『西尾実国語教育全集第六巻　国語教育理論集説(二)』1975，教育出版，pp. 99-102

13　市古貞次（1975）校注・訳者『日本古典文学全集30　平家物語二』小学館，pp. 369-363

14　２に同じ，p. 107

15　２に同じ，pp. 115-117

16　冨倉徳次郎（1967）『平家物語全注釈下巻一』角川書店，p. 461

（兵庫教育大学連合大学院）

2010. 7. 30　発送

NII-Electronic Library Service